

曲想表現を豊かにする子どものためのイメージ演奏法の検討

ードビュッシーのピアノ曲『子供の領分』より「象の子守歌」からの検討ー

夏 目 佳 子

要 旨 子どもが新しいピアノ曲を演奏する場合、楽譜の音符を必死に読みながら演奏したり、音の長さを正確に演奏することを意識しすぎたりと、曲に対するイメージを持って演奏することが少ない。練習過程において、譜読みを正確に行うことは重要であるが、音読みに意識が偏っている場合は、練習が退屈になってしまう。また、演奏される曲は曲想の乏しいものになってしまう。そこで、子どもが発想できるイメージをいかした練習方法を実践し、そのイメージ表現で曲を演奏することにより、曲想豊かな演奏ができるかを検討する。その際、ドビュッシー作曲『子供の領分』より「象の子守歌」の冒頭4小節の左手で演奏するメロディーを使用する。また、その後、子ども自身がピアノの練習過程において、取り組み方法にどのような変化をもたらしたかも検討する。

1. はじめに

発表会などで演奏する場合、子どもはイメージを十分に創りあげておかなければ曲想が乏しい演奏になる場合が多い。子どもはピアノを練習する過程において、楽譜の音読みに偏りがちになりやすい。練習過程や譜読みの段階においてイメージを創りあげ、ピアノの音に表現をつけるには、どのような方法が子どもにとってよいのかを明らかにすることを目的とする。

そこで、子どもが明確なイメージを持ちやすい身近な「動物イメージ」を活用し、演奏することにする。この方法を『動物イメージ奏法』と名付ける。まず、演奏するメロディーから感じられる動物をイメージする。次にその動物らしさを表現できる奏法を見つける。その奏法で練習をする。そして実際の曲を演奏させ、曲想豊かな演奏ができるようになったかを検討してみる。また、いろいろな動物らしさを表現できる奏法の検討もあわせて行う。使用したメロディーは、ドビュッシー作曲『子供の領分』より「象の子守歌」の冒頭4小節の左手で演奏するメロディー〈譜例1〉である。

〈譜例1〉



図1 「象の子守歌」の1小節目から4小節目の楽譜

2. 「象の子守歌」について

ドビュッシー作曲のピアノ曲集『子供の領分』は、愛称シュウシュウというかわいいうる子が織りなす子どもの世界を、ドビュッシーが大人の目線から曲にあらわした作品である。「象の子守歌」は、全6曲中の2曲目にあたる。シュウシュウが、フェルト製の象のぬいぐるみにお話を子守歌のように聞かせながら眠らせている。そのうちシュウシュウも一緒に眠ってしまい夢の世界に入ってゆく。その夢の中で、シュウシュウと象は、踊りだし、最後には、すっかり眠りに入ってしまう。このような大変和やかな雰囲気曲である。

3. 子どものイメージから創り出す動物イメージ演奏

この「象の子守歌」の、やわらかいイメージを、いかに子どもに表現させるか。何をイメージしながら演奏すれば、曲のイメージを表現できるのであるか。

子どもの生活の中で、身近な存在からイメージを創りあげることがよいと考え、動物からイメージを膨らませることにした。実際、子どもは、動物園に行ったり、家で動物を飼っていたりと、動物と触れる機会がわりと多く、子どもにとって、動物は、身近な存在である。また、動物は、特徴がはっきりしているため、形や動きなどいろいろな観点から、イメージしやすいと考えた。

そこで、この「象の子守歌」の冒頭4小節の左手で演奏するメロディーを使用し、曲のタイトルを知らない子どもが、最終的にどの動物をイメージして演奏したいのか、また、その動物らしさを表現するためには、どのような手法で演奏したらよいか、子どもとともに検討した。また、このメロディーには、演奏上レガートが記載されているため、レガート奏法も考慮しながら、子ども各個人のイメージを『〇〇動物イメージ奏法』と名付け、その子ども用とした。最終的に、どの動物イメージ奏法が一番この曲のイメージに合う演奏ができたかを検討した。演奏時は、『動物イメージ奏法』とレガート奏法もいかにしている。その際、筆者は、動物イメージに近い演奏手法のアドバイスや、その他の発想イメージをするための参考意見を述べている。しかし、それを使用するか否かは、子どもの意志やイメージを尊重している。

また、なぜ「象の子守歌」の冒頭の10小節の左手で演奏するメロディーではなく4小節の左手で演奏するメロディーを使用したのか、理由は以下の2点からである。①子どもは、初めて演奏する曲が、あまりにも長かったり、タイなどで音符の長さを意識すると、音符の長さを数えるのに精一杯になってしまい、曲想まで考えられなくなってしまう。この「象の子守歌」の冒頭の左手で演奏するメロディーは、10小節の単位で考えるのが音楽的であると思われるが、子どもに動物イメージさせるのに、メロディーがあまりにも長いと難しくなり、演奏時に演奏できなくなる心配がある。また、タイがあるため、音符の長さを数えてしまうことにより、イメージが壊れやすくなる。以上を考慮して、4小節とした。

②レガート奏法で演奏するように楽譜に記載されているが、レガートのかけ方が後半部分で細くなる。実際子どもが演奏する時、レガート奏法のフレーズ感を演奏の途中で失わないように、4小節の一番短いフレーズを使用した。

3-1. 曲から感じる動物イメージの検討

動物イメージ奏法を検討するために、「象の子守歌」の冒頭4小節の左手で演奏するメロディーを使用して、子どもに4点の質問をし、解答を得た。子どもは、この曲のタイトルを知らない。また、質問時に、タイトルは明示していない。質問内容は①「象の子守歌」の冒頭4小節の左手で演奏するメロディーを聴いた時、何の動物をイメージしたか、②なぜ、①の動物をイメージしたのか、③「象の子守歌」の冒頭4小節の左手で演奏するメロディーを実際に子ども自身が演奏する場合、イメージを伝えたい動物名、また、④ではメロディーや演奏と関係なく①、③で答えた動物のイメージの4項目である。子ども4名（以下被験者1～4）の解答は以下である。その後、この解答をいかし、イメージ演奏へと展開してゆく。

被験者1

性別	女子
学年	小学6年生
①	象
②	聴こえたメロディーの雰囲気象のように大きいイメージがしたから。
③	象
④	大きな動物で、どっしりした感じ。少し重々しい感じ。

被験者2

性別	女子
学年	小学5年生
①	象
②	聴こえたメロディーの音が低いから。象が歩いているような感じがしたから。
③	象
④	どしどし歩いている感じ。

被験者 3

性別	女子
学年	小学 3 年生
①	象
②	聴こえたメロディーの音の高さが低くて、象のような感じがしたから。
③	象
④	ゆっくり歩いている。一步一步が重い感じ。

被験者 4

性別	男子
学年	小学 2 年生
①	象
②	象が鼻をゆっくり動かしている感じがしたから。
③	象
④	のしのし歩いている感じ。長い鼻をよく動かしている。

子どもの解答結果から、「象の子守歌」の冒頭 4 小節の左手で演奏するメロディーを聴いた時、曲のタイトルは知らなくても 4 名全員が象のイメージをしたことは、メロディーから象らしさが伝わっていることになる。象という解答の理由は、象のような大きなイメージがしたから、音が低いから、のしのししていたから等、様々であるが、メロディーを聴いただけで象という解答が得られたことは、ドビュッシーの作曲が大変すばらしいということであろう。また、子どもは、自分自身の描いている動物のイメージと一致する音の高低（低い音）や速度（ゆっくり）により、動物をイメージしていることもわかった。

3-2. 動物イメージを伝える演奏方法の検討

この「象の子守歌」の冒頭 4 小節の左手で演奏するメロディーを子どもに実際に演奏させ、象イメージをピアノの音で表現する手法を考えることにした。

検討点 1；象をイメージした音をピアノで演奏する場合、どのような演奏方法をすれば、象らしさが伝えられる音が出せるか。

— 子どもからみた象のイメージ —

- ・ のしのし歩いている。
- ・ 鼻が長い。
- ・ 鼻をゆっくり動かしている。

- ・ 体がとても大きい。
- ・ 象の親子でいる感じがする。

以上のような意見が出た。例えば、「のしのし歩く」をイメージして演奏する場合、5 本の指は長さや太さ等すべて異なるが、この 5 本の指を象の足に例え、一音一音演奏するたびに指先に重みをかける演奏をさせてみた。この演奏方法で子どもが演奏した場合、子ども自身は以下のように感じた。

被験者 1	象の重みが表現できた。
被験者 2	象の重々しい感じで歩くイメージで演奏した。
被験者 3	大きな象が歩いている感じで表現した。
被験者 4	象が踏みしめて歩いている感じと、鼻をゆっくり動かしている感じで演奏した。

次に、比較として反対のイメージの、走るような感じを、一音一音に「重みをかけない」ように演奏させてみた。この比較により、一音一音に重みをかける演奏法による、「のしのし歩く」のイメージがより理解しやすくなった。一音一音に重みをかけない演奏は、象のイメージはしないという結果であった。どちらかというと、馬とか猫とか犬のように跳んだり跳ねたりできる動物をイメージしたようである。そこで、子どもとイメージを話し合った結果、「のしのし歩く」演奏法を『象イメージ奏法』と名付け、「軽く走る」演奏法を子ども自身のイメージに合わせ、『馬イメージ奏法』『猫イメージ奏法』『犬イメージ奏法』と名付けた。

子どもが象をイメージしてピアノを演奏すると、大きな音で演奏する。それは、象がとても大きな動物であるというイメージからのようである。このドビュッシーの「象の子守歌」の冒頭のメロディーは、p（ピアノ、弱く）で演奏するよう指示がある。この部分を p と f（フォルテ、強く）とで比較演奏して、どのようにイメージが変化したのか質問した。その結果、この強弱法の違いのイメージは、f が親の象、p は子どもの象と考えるという子どもの意見があった。ちょうど、この「象の子守歌」は、シェウシェウが一緒に寝られる大きさのぬいぐるみであるようにも思える。要するに、小さな象なのである。そして、この p は、子守歌のように語り歌うという意味合いもあるのである。子どもの演奏においても、

f は大きな象で重々しさが重要視されたが、p であることを認識させると、この「象の子守歌」らしい、かわいくてやさしい音色になった。それは、イメージ演奏による強弱法が、子どもの演奏に大きな影響を与えたことになる。

検討点 2 ; 子どもにとって、『象イメージ奏法』だけが象をイメージする表現なのであろうか。

一音一音に重みをかけ、「のしのし歩く」奏法が象イメージ奏法であるならば、他に、象を表現できないのであろうか。指先に重みをかけている感覚がわかりやすい演奏方法に、鍵盤に指をすべてつけてしまい、演奏する音のみ打鍵する方法を使用し、子どもがどのような動物イメージをするのか検討した。

	動 物	理 由
被験者 1	かたつむり	はっているイメージ。
被験者 2	へび	にゆるにゆるはっている感じ。
被験者 3	かめ	のそのそとはっているイメージ。
被験者 4	かば	水の辺りをゆっくりはって歩き、口をカバーと開けて動いている感じ。

この結果、鍵盤に指をすべてつけてしまうことによって、「はう」という共通点ができた。例えば、この奏法でピアノで曲を演奏する場合、被験者 1 は『かたつむりイメージ奏法』、被験者 2 は『へびイメージ奏法』、被験者 3 は『かめイメージ奏法』、被験者 4 は『かばイメージ奏法』ということになる。このように、子どもによって感じる動物のイメージが異なれば、奏法名も変化するのである。そして、4 名の子どもに再度確認したところ、このイメージ奏法では、象のイメージはしないということであった。

検討点 3 ; 「象の子守歌」の冒頭 4 小節の左手で演奏するメロディーを実際に演奏し、象のイメージを表現するには、『象イメージ奏法』と、子ども各個人で異なった検討点 2 の動物イメージ奏法、どちらが象らしさを表現できるのであろうか。

実際に、子どもと検討した結果、以下のようなった。

被験者 1	『象イメージ奏法』のほうがより象らしさが表現できた。
被験者 2	『象イメージ奏法』のほうがより象らしさが表現できた。
被験者 3	『象イメージ奏法』のほうがより象らしさが表現できた。
被験者 4	『象イメージ奏法』のほうがより象らしさが表現できた。

『象イメージ奏法』は、象の様子からイメージして創りあげた演奏方法である。しかし、検討点 2 から得た演奏方法は、象のイメージは感じなかったのである。要するに、子どもにとって、最終的に象イメージを伝えるためには、象のイメージをしているほうが演奏しやすいようである。

検討点 4 ; 象の重さを表現する『象イメージ奏法』以外の象を表現する演奏方法の検討。

検討点 1 で、重い、軽いのイメージの比較として、走るような感じで、一音一音に重みをかけないように演奏してみた際、象のイメージはしないという結果であった。

子どもにとって、象のイメージをピアノ音で表現する場合、子どもの描いている象の大きさ、すなわち象の重みを表現することが、一番わかりやすいようである。「象の子守歌」の冒頭 4 小節の左手で演奏するメロディーを演奏する際のイメージは、象が最もよいという結果である。

今回は、4 名とも『象イメージ奏法』で演奏した方が象らしさを表現できたという結果であった。象を最終的に演奏する目標にしている場合、子どもは、どうしても象を思い描いているようであり、他の動物をイメージして目標の動物を表現することは、難しいことであるようだ。例えば、象をイメージした音の強弱法での変化も、象の大きさをイメージした音の大小であったことにも言えるのである。要するに、一つの動物をイメージする演奏の場合は、その動物からイメージを創りあげることのほうがよいようである。

この実験に参加した子どもの現時点でのイメージ演奏検討方法は、この先、この「象の子守歌」を演奏できる年齢に子ども自身がなった場合、また、大人が演奏会用等として演奏する場合とは、解釈や表現するニュアンスとは異なっている場合もあるかもしれない。しかし、ピアノ演奏の技術等に子どもに

よる個人差があるのと同様、すべての人のイメージが同じになるとは限らない。大切なのは、子どもであっても、作曲家が意図した内容をピアノの音で表現し、演奏できるように練習過程において表現を身につけられるかということである。動物をイメージした演奏で曲想を豊かにする方法は、子どものピアノ演奏に有効と考える。

4. 子どもたちが創りあげるピアノの練習過程における『動物イメージ奏法』の検討〈実験後のピアノレッスンの様子から〉

以上の『動物イメージ奏法』創りの実験に参加した子ども4名が、その後、ピアノの練習過程において、また、ピアノレッスンにおいて織りなす様子や発言を記載する。練習曲数は、子どもによって異なるが、本論文では、その中の特に変化が出てきた曲の一例を取り上げる。また、子どもの性格も考慮し、筆者自身が質問した場合や、子ども自ら発言した場合もある。

被験者1

- ・性格：おとなしく、はずかしがり屋の子ども。
- ・実験参加後の練習に対する気持ち：筆者が、その後の様子をきいた。曲の一部分ではあるが、少しはイメージして弾いているとのこと。
- ・筆者の感想：被験者1は、もともと譜読みに時間をかける傾向があり、難しい箇所になると、まだ音読みに必死になる場合もある。少しずつではあるが、ピアノの音色の変化を意識するようになり、被験者自身の練習量が増した時には、音楽のお話が伝わるようにはなってきた。演奏に思い入れが入るようになってきた。
- ・演奏曲：エステン作曲「お人形の夢と目覚め」。

①子守歌の1小節目から8小節目までの箇所〈譜例2〉は、特に右手で演奏するメロディーが、やさしいので、かめがゆっくり歩いている感じがする。これを『かめイメージ奏法』とし演奏する。

〈譜例2〉

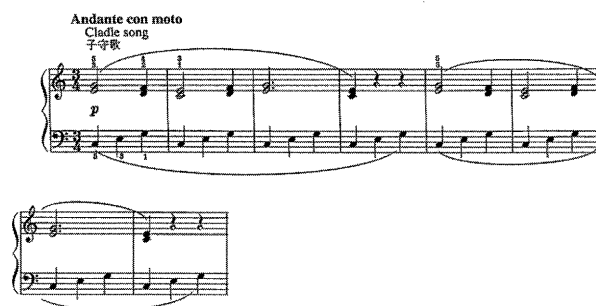


図2 1小節目から8小節目の楽譜

②お人形の踊り〈譜例3〉の53小節目から60小節目までは、うさぎが楽しそうに跳びはねているイメージなので『うさぎイメージ奏法』で演奏する。

〈譜例3〉



図3 53小節目から60小節目の楽譜

被験者2

- ・性格：自分の意見がはっきり言える子ども。
- ・実験参加後の練習に対する気持ち：多少はいろいろな動物をイメージして弾くようにしている。忘れる時もある。
- ・筆者の感想：被験者自身も発言しているように、少しは何かを意識してイメージし、演奏するように心がけているようだ。同じ箇所のメロディーを演奏していても、イメージをしている時としていない時では、音色に差が出る。演奏直後に、何らかイメージして演奏したかと筆者が質問すると、イメージしている時はイメージらしい音が表現できているが、イメージしていない時は、音をただ演奏しているだけの音になってしまう。

・演奏曲：クレメンティ作曲「ソナチネ Op.36-3 第1楽章」〈譜例4〉。

- ① 1小節目から4小節目の右手のメロディーは、猿が次から次へと木につかまっのびのびと走り回っているイメージなので『猿イメージ奏法Ⅰ走るバージョン』で演奏する。
- ② 5小節目から8小節目の右手のメロディーの特にスタッカートの箇所は、猿が木からおりて踊っているイメージなので『猿イメージ奏法Ⅱ踊るバージョン』で演奏する。

〈譜例4〉



図4 1小節目から8小節目の楽譜

この子どもの場合、同じ猿のイメージであっても、曲の途中で猿の動きが変化した。①の『走るバージョン』は、演奏時、右手のメロディーの付点4分音符の箇所は、猿が木から次の木へ移動する時、長い距離を動いた、のびやかな雰囲気を出す。8分音符や16分音符は、猿の動きが細かく、距離感が狭い範囲の動きになる。②の『踊るバージョン』は、猿の踊りなので、猿が片足ずつあげては体を横に動かしているイメージ。①よりは、リズムカルな感じを表現する。

被験者3

- ・性格：しっかり者の子ども。
- ・実験参加後の練習に対する気持ち：少しずつイメージして演奏できるようになった。考えているメロディーや曲に対しては、自分なりにここのイメージはこうなど、イメージをお話して演奏してくれる。

・筆者の感想：イメージのお話通りに演奏できるようになってきた。イメージが浮かばなかったりする場合は、筆者と一緒に考え、イメージを膨らませるように努力している。少しずつではあるが、音色に変化も出てきたようだ。

・演奏曲：ブルクミュラー作曲『25の練習曲』より「タランテラ」。

- ① 8小節目6拍目から16小節目5拍目まで右手のメロディー〈譜例5〉は、りすが走り回っているイメージ。☆印の箇所は、りすがかわいらしく跳ねている（跳んでいる）感じがする。全体を『りすイメージ奏法』で演奏する。

〈譜例5〉

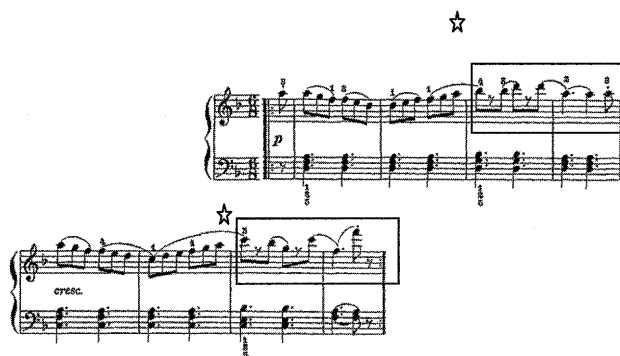


図5 8小節目6拍目から16小節目5拍目の楽譜

- ② 33小節目から48小節目までのD durの箇所〈譜例6〉は、カンガルーが跳ねている感じがする。大きく跳ぶのではなく、わりと跳ぶ距離が短い感じ。かわいらしく跳ぶイメージなので『カンガルーイメージ奏法』で演奏する。

〈譜例6〉



図6 33小節目から48小節目の楽譜

また、この子どもの場合、同じ曲の中に登場した動物が変化した。もちろん、曲が途中で転調した(d moll→D dur→d moll) ことにより、イメージが変化するのは当然であるが、何もイメージしなければ、調号の変化にも気づかずに演奏してしまう時もあるのである。しかし、登場する動物の変化により、調が変化したことにも意識ができるようになったようである。

被験者 4

- ・ 性格：いろいろなことをお話してくれる子ども。
- ・ 実験参加後の練習に対する気持ち：課題になった曲に対して、ここはこの動物とこの動物などが一緒に踊っている等、イメージが膨らんで楽しそうに話してくれる。それを演奏に表現してと筆者が促すと、もちろんとの解答。そして、その後のレッスンで、以下の演奏曲の記載のような出来事があった。
- ・ 筆者の感想：実験自体も楽しいと発言していて、その後、どのように練習してくるか興味があった。演奏する曲のレベルがあがってきたと同時に、難しい曲が演奏できるうれしさの向上心も、音楽を楽しく感じる効果につながったようである。次の箇所もイメージしてくると発言していたので、続きが楽しみである。
- ・ 演奏曲：ブルクミュラー作曲『25の練習曲』より「牧歌」。

左手の3小節目から10小節目までの和音〈譜例7〉を、イルカのイメージで演奏したと被験者本人が報告した。演奏を聴くと、以前より他の曲の場合でも音楽の流れが止まりやすい子どもではあるが、今回は4拍目から6拍目の付点4分音符を演奏する時にイルカが長い距離を泳いでいるイメージで演奏したということで、音楽が見事に流れているのである。しかも、拍を数えるというより、音楽の流れが自然である。特に、和音が変化した箇所と次の和音の箇所(☆記載)は、長い距離をイルカが泳いだとのこと。和声感の響きまでイルカの動きに特徴を思い描いたのである。この被験者の場合、確かにイルカは好きな動物であるという報告は、以前にきいたことがあったが、このような箇所にイルカをイメージしたことが、被験者の演奏の音楽の流れを生み出すことになったのである。被験者本人が、曲のこの部分

を動物をイメージし上手に弾けたとアピールしてきた曲である。レッスンのはじめに、うれしそうに一番目に弾きたいと言っていた。演奏してイメージを伝えたかったようである。曲のこの部分を『イルカイメージ奏法』で演奏する。

〈譜例 7〉

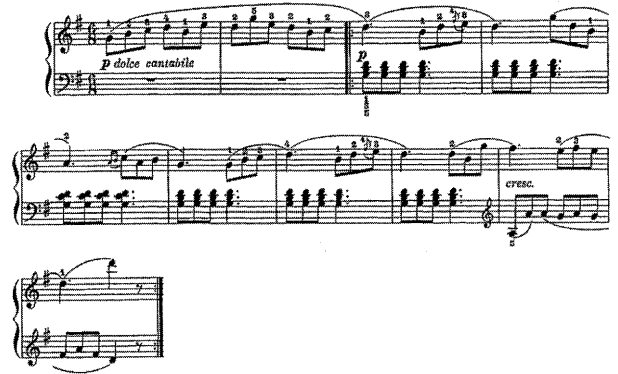


図 7 1小節目から10小節目の楽譜

以上のように、子どもなりにピアノの練習過程において、イメージ創りを楽しみながら演奏するという概念が、定着していつているようである。そして、演奏が、大変いきいきとした、そして、何より、音楽の流れがスムーズになってきたことが、大変効果的になった。しかし、これは、まだ曲の一部にすぎないので、今後は、曲の途中でのイメージの変化やイメージの持続性を培ってゆく必要があるのである。

これは、成長した過程のほんの一部にしかすぎない。しかし、子どもは、案外人の意見をよくきいていて、よく覚えていることが多い。一度楽しいことを発見すると、飽きるまで続けられる子どももいる。その覚えたことから発展した学習方法を指導者が提示したり、時には、子どもから、また、子どもの練習時に付き添っている親などからの意見で子どもがつかんだ方法等、学習過程は、様々な環境に大変大きく左右されるのである。

ピアノの学習において、発想を育て上げ、たった4小節のメロディーからでも、たくさんの学習ができる。飽きやすい子どもにとって、根気よく基礎を身につけさせるためには、時に発想の転換をすると効果があがるようである。

5. 動物イメージと曲のタイトルの共通性はあるのか

曲のタイトルに動物名がない場合でも、曲のある部分に動物イメージを持つことができた。「象の子守歌」は、曲のタイトルに象という限定された動物名があったが、タイトルを知らない子どもたちは、聴こえたメロディーから象をイメージして象イメージ奏法を創り出した。最終的に象を伝えるためにピアノの音で象を表現したのである。曲のタイトルに動物が存在すればその動物の様子で表現するのが適当なようである。しかし、動物名が曲のタイトルになければ、その曲のタイトルに関係なく、演奏の表現を重要視し、演奏したいイメージの動物を探し、演奏にあてはめ、いかすようである。

タイトルにない動物をイメージすることにより、子どものピアノ演奏に子どもなりの表現力が生まれた。曲が転調したり、リズムが変化したりした場合には、子どもがイメージし、登場した動物も変化するのである。先にも述べたが、「象の子守歌」の場合は、曲のタイトルに象があるため、象のイメージをすることが一番よい結果がでたが、タイトルに動物がない曲には、子ども自身のイメージで動物イメージを創りあげることができるのである。例え、タイトルとかけ離れているイメージであっても、子どもの演奏へのイメージは、子どもの世界で理解できる内容で結びつけるほうが理解しやすいようである。イメージを膨らましてから、タイトルの本当の意味を理解するもよいし、タイトルの本当の意味を理解してから、そのタイトルのイメージに近い子どものイメージで曲想を膨らませるのもよいのであろう。タイトルにない動物をイメージしたとしても、曲のタイトルの意味にイメージした動物がいなくても、タイトルに近づける曲想を持つ演奏をしていることは、子どもに確認したところ、理解できている。

動物イメージと曲のタイトルの共通性は、強く関係する場合もあれば、関係ない場合もあるようである。特に、子どもの場合は、演奏しているメロディー部分を一生懸命イメージしようとするため、場面ごとに常に登場する動物やイメージが変化するためである。タイトルに動物があれば、その動物のイメージをする子どもが多い。

6. 結論と今後の課題

子ども自身がピアノの練習過程において、曲に対して自らの発想でイメージし、そのイメージを持って演奏した曲は、曲想豊かな響きを持ち、感動的である。この「動物イメージ奏法」は、子どものピアノ学習と演奏に大変効果的である。しかし、曲の部分ごとにイメージをつけ、曲全体の構成をするには、いろいろなイメージが持てるようになることが必要である。そのためには、多くの曲に触れたり、日常生活の中で多くの体験をすることが大切となる。一曲全体を、子どもの発想で、たくさんの動物により表現できたら、音楽がいきいきとして聴く人に伝わってくるのである。子どもなりの、楽しさや元気さ、悲しさ、歌う等、様々な表現をピアノの音色によって奏でられる演奏を追求し、完成度の高い演奏ができるように指導者として心がけてゆかなければならない。

今後は、動物以外の発想も検討し、演奏する音楽にあらゆるイメージができるようにさせてゆきたい。また、子どもの知識の有無によって、演奏の深みが変わるのかどうかを検討し、子どもが意欲を持ち練習をし、効果の上がるピアノ指導方法をさらに検討してゆきたい。

【参考文献】

- 1) 井上直幸 ピアノ奏法－音楽を表現する喜び 春秋社 1998
- 2) ムジカノーヴァ 9月号 ムジカノーヴァ 1993
- 3) ムジカノーヴァ 9月号 ムジカノーヴァ 1994
- 4) ムジカノーヴァ 9月号 ムジカノーヴァ 2003
- 5) 最新ピアノ講座 第8巻 ピアノ名曲の演奏解釈Ⅱ 音楽之友社 1982

〈譜例 1 ; 「象の子守歌」の 1 小節目から 4 小節目の楽譜〉

Assez modéré

p doux et un peu gauche

pp >

〈譜例 2；エステン作曲「お人形の夢と目覚め」の1小節目から8小節目の楽譜〉

『かめイメージ奏法』…子守歌のやさしいメロディーが、かめがゆっくり歩いている感じがしたから。

Andante con moto
Cladle song
子守歌

p

〈譜例 3；エステン作曲「お人形の夢と目覚め」の53小節目から60小節目の楽譜〉

『うさぎイメージ奏法』…うさぎが楽しそうに跳びはねているイメージ。

Allegretto moderato
Dolly dances
お人形の踊り

p scherzando

〈譜例 4；クレメンティ作曲「ソナチネ Op.36-3 第1楽章」の1小節目から8小節目の楽譜〉

『猿イメージ奏法Ⅰ 走るバージョン』…猿が次から次へと木につかまっのびのびと走り回っているイメージ。

- 箇所…付点4分音符は、猿が木から次の木へ移動する時、長い距離を動いた、のびやかな雰囲気を出す。
- 箇所以外…8分音符や16分音符は、猿の動きが細かく、距離感が狭い範囲の動きになる。

The musical score is presented in two systems. The first system (measures 1-4) is marked 'Spiritoso' and 'f' (forte). It features a treble staff with a melodic line and a bass staff with a supporting line. The second system (measures 5-8) is marked 'p' (piano). It continues the melodic and harmonic development. The score includes various musical notations such as slurs, ties, and fingerings. An arrow points from the text '猿イメージ奏法Ⅰ 走るバージョン' to the first system, and another arrow points from the text '猿イメージ奏法Ⅱ 踊るバージョン' to the second system.

『猿イメージ奏法Ⅱ 踊るバージョン』…特にスタッカートは、猿が木からおりて踊っているイメージ。猿の踊りなので、猿が片足ずつあげては体を横に動かしているイメージ。奏法Ⅰよりは、リズムカルな感じを表現する。

〈譜例 5 ;ブルクミュラー作曲『25の練習曲』より「タランテラ」の8小節目6拍目から16小節目5拍目の楽譜〉

『りすイメージ奏法』…りすが走り回っているイメージ。☆印の箇所は、りすがかわいらしく跳ねている（跳んでいる）感じ。

〈譜例 6 ;ブルクミュラー作曲『25の練習曲』より「タランテラ」の33小節目から48小節目の楽譜〉

『カンガルーイメージ奏法』…曲の途中で転調した D dur の箇所は、カンガルーが跳ねている感じ。大きく跳ぶのではなく、わりと跳ぶ距離が短い感じ。かわいらしく跳ぶイメージ。

〈譜例 7 ; ブルクミュラー作曲『25の練習曲』より「牧歌」の 1 小節目から 10 小節目の楽譜〉

『イルカイメージ奏法』…左手の 3 小節目から 10 小節目まで

子ども自身が、イルカが長い距離を泳いでいるとイメージして演奏した…音楽の流れが見事に流れた箇所

The image displays a musical score for a piano piece. The top system shows the first two measures of the piece, marked *p dolce cantabile*. The right hand plays a melody with fingerings indicated above the notes. The left hand plays a bass line. A black arrow points to a specific chord in the right hand. The middle system shows measures 3 through 10. The left hand has a series of chords, with a box highlighting measures 3 through 6. A star is placed below the box. The right hand continues the melody. A *cresc.* marking is present in measure 10. The bottom system shows a close-up of the left hand's chords, with an arrow pointing from the star in the middle system to this section.

☆イルカが長い距離を泳いだとのこと。和声感の響きまでイルカの動きに特徴を思い描いた箇所。